

直説法によるヒンディー語授業の体験

浅 山 佳 郎

1999年9月から11月まで、インドのムンバイにある印日協会日本語学校の日本語教師であるアグボートワラ・マイトリーさんが神奈川大学の日本語教員養成課程に研修生として来られた。彼女のすぐれた日本語能力やその研修結果についてはおいておいて、ここでは、彼女に頼んで行ってもらった「ヒンディー語授業」について、参加した学生からの報告を交えて、記したいと思う。

第2言語としての日本語の教育について学ぶのが、日本語教員養成課程の目的である。毎年数名の修了生が実際に日本語教師となる。ところで、母語話者による日本語教育は、他の多くの言語教育と同様、直説法をとる。ここで「直説法」というのは、H.PalmerのOral-Aural Approachのような、今世紀初めに提唱されたいわゆるDirect Methodを限定的に指すのではなく、日本語によって日本語を教えること全体を指して言うことにする。

我々の第2言語教育への印象は、中学校での英語教育の経験に基づくことが多い。そこでは日本語、つまり学習者の母語によって英語が教えられる。そのことの是非は別にして、いっぽうで、神奈川大学の日本語教員養成課程を修了して海外で日本語教師となる卒業生の大半は、その任地の言葉はある程度学習してから行くものの、日本語だけで授業を行うことが多い。

つまり、自分は母語で第2言語を教えられた経験しかない日本語教師が、学習言語となる日本語でその日本語を教えるのである。次のような疑問が浮かぶ。全く知らない言語を学ぶ手段としてその言語自体が用いられていても人は言葉を学べるのか、そうやって行う最初の授業で全く知らない言語はどんなふうに聞こえるのか、授業が理解され学習が進むためには目標言語をどれくらい使ってもかまわないのか、などなどである。

そこで、そうした経験とするため、マイトリーさんをお願いしてヒンディー語によるヒンディー語の初級の授業を行ってもらった。日本語教員養成課程で学ぶ学生にこの予定を話したところ、10名以上の学生が参加した。時間の都合でわずか2回しか開けなかったが、ほとんどの学生にとって見るのも聞くのもはじめてというヒンディー語の授業は、「直説法」による第2言語教育が、どのような印象のものなのかをつかむ、またとない機

会になったようである。

以下は、参加者の1人である英語英文学科の3年生が記した感想である。

「マイトリーさんのヒンディー語講座を受けて」

若松 智美

インドから来られたマイトリーさんの暇を見て行われたヒンディー語講座に参加した。

これは直説法で行われた。私はこれまで直説法によりまったく触れたことのない言語を教わるのは初めてであった。そのため先生の言っていることがわかるかどうか不安であった。しかし、先生の発するヒンディー語は限られており、人名の呼び方、我々がこれから習う単語、質問のために必要な語などであった。その他に言いたいことは、ジェスチャーを用いられた。

そのおかげで、終始楽しいヒンディー語講座を受けることができた。マイトリーさんは、カードにヒンディー語の単語をカタカナで書いて、我々に示し、それを使って簡単な文を口頭で練習させた。私が学んだヒンディー語は次のようなものである。

メラ ナム ワカマツ ジ。

私の名前は若松です。

アプ テイク ヘ、ーハ メイ テイク フ。

お元気ですか。ーはい元気です。

メイ ヒンディバシャ キ アディヤピカ ホ。

私はヒンディー語の先生です。

また、ヒンディー語に用いられる文字の綴りも習ったが、非常に困難に思えた。音声として覚えるのは簡単なようだが、綴りまで覚えるとなるとかなりの時間と労力がかかりそうである。

授業ではマイトリーさんは、カタカナを発音記号として用いた。アルファベットでもかまわないところであるが、学習者の便を考慮のことだったと思う。そのようにして提示された単語を使って、基本的な名詞述語文（「AはBデアル」という意味の文）の練習が行われた。ヒンディー語の名詞には性の別があるが、それによって名詞述語文を作る述語（繫辞または判定詞などの役割をはたす語）の形がかわることなど、言葉によって説明しなければ難しいのではないと思われるようなことも、ヒンディー語だけで繰り返し例文を提示することによって十分伝わることを経験できた。

性による属格表示の区別が分かった時には、クラス全体に「ああそうだったのか」という意味のため息が響いた。この授業は、日本語教師となっ

た時に、無形のしかし確実な経験となるだろうと考える。